

バックエンド部会の不易流行

2022年度バックエンド部会長

佐々木隆之

バックエンド部会は、放射性廃棄物部会、その前身の研究連絡会（1984年～）に端を発し、研究者間の情報共有、意見交換の場として活用されてきた。今回は少し見方を変えて、舞台裏に触れてみたい。まず部会誌は「放射性廃棄物研究（1994年～）」から「原子力バックエンド研究（1997年～）」となり、自然科学（工学、理学等）のみならず、人文・社会科学、それらの学際領域を含む最新の知見を公表する媒体として浸透している。投稿して下さる方もさることながら、様々な専門家で構成される出版小委員会委員のご貢献によるところが大きい。2009年に電子化、その後J-Stage入りし、発信力はハード面で着実に向上してきた。また、部会員に送られる部会情報メール、気付けば更新頂いているNUCEホームページは、作成・配信の迅速な連携から日常のメンテナンスに至るまでホームページ小委員会委員のご貢献による。これらのアウトプットは部会の存在意義そのものであり、滞りなく維持されていることは大変ありがたく、感謝以外にない。ただ現場では、特に若手や中堅の方々の負荷が部会内でうまく分散するような仕組みが必要との声もあることを付記したい。

母体である運営小委員会の活動内容は、春と秋の学会に合わせて行われる全体会議にて審議や報告でご承知のことと思うが、恒例行事であっても裏で様々な議論がある。「春・秋の学会での企画セッション」は、学会員のバックエンド分野の知識の底上げを図るよう、部会横断的なトピックや学会専門委員会などの報告を適宜取り上げ、討論を行う場を企画している。また、38年続く部会「夏期セミナー（1985年～）」は、ホットな話題の共有や、重要課題を先取りした専門的内容について密に意見交換することを目指し開催してきた。経緯や実情を広く深く知る経験者同士のやり取りは、聴講するだけでも刺激を与えてくれる。そして「バックエンド週末基礎講座（2003年～）」は、学生や新たに業務や研究に携わる社会人がバックエンド分野の基礎を学ぶ座学、用意した題目についてグループを組んでのミニ討論、バーチャルを含む見学会など、対面でもリモートでも学び交流できる場が作り込まれている。他にも表彰、助成や補助、対外イベント協力、学会対応等々、陰に陽に活動を支えている。

基礎、実践といった部会員が根ざすところは様々だが、部会員同士のつながりの重要性については、部会の「サロン」的役割への期待として、既刊の部会誌でも度々述べられてきた。個人的には、アナログ的会合が有効な手段であることに、約3年のコロナ禍を経て改めて思うところだが、急速に進化した通信手段の活用（ここでも裏方のご貢献に感謝）が、「サロン」の活用方法を対話とリモートの二刀流に昇華させ、世代間のギャップさえも埋めてくれているように感じる。

さてここ10年、様々な施設の廃止が決まり、福島第一原発事故炉の廃止措置にも挑む中、低レベル廃棄物、高レベル廃棄物、燃料デブリ、クリアランス等、多種多様なバックエンドの推進は原子力エネルギー政策の社会的受容性を担う核心的課題へとようになってきた。部会活動にも、研究開発とコミュニケーションの両輪に対する意識の高まりが見て取れる。一例として、原子力安全部会との分野横断的な専門家間の対話の場がある。廃棄物管理や処分に関する技術的内容や経緯を振り返りつつ、処分事業の在り方進め方において、何が正しいかを最初からゴールとせず自由で建設的な対話を尊重する場の形成を重視している。少数有志に端を発したこの取り組みに、参加者は増加傾向にある。また、やや手前味噌で恐縮だが、学会特別専門委員会では、人文社会系の専門家も交えて、いわゆるセーフティケースをはじめ地層処分特有の概念や用語に対する認識のギャップや分かりにくさの根本を探り、それを解消するための取り組みが進められている。こうした試みは、成熟途上にある我が国のバックエンド工学にはまだ何が足りないのでは？と部会員が過去に習いづつも、新たな変化を重ねたいという気概の表れと考えたい。現世代で終わらない長期のミッションを、さらに次の世代に引き継いで貰いたいという風土を引き続き醸成していければと思う。

運営に、副部会長として2年、部会長として1年携わらせて頂き、全て会員がバックエンド部会を支えて下さっている

ことを改めて実感した。年度が変わり、運営小委員会も半数改選とともに、また新たな体制での活動が始まっている。末筆ながら、これまでの委員各位のご貢献に深謝するとともに、新体制の皆様のご活躍をお祈り申し上げる。多くの組織で人員削減や業務効率化が進み、色々困難な状況と推察するが、皆様それぞれのスタンスとスタイルで「サロン」にお力を注いで下されば幸いである。

(2023年6月)